

紹介書

す』とは、著者の卷初に公言せらるる所、余輩著者の此の誠意に酬ひんが爲めに、自ら揣らず管見を披瀝したり。而も是れ眞に著者の目的に副ひ、相共に研究の歩を進めんとするの微意に出づるもの、著者必ず之を甘受せらるべきを信するなり。

若し夫れ余輩の九州古代住民に關する詳細なる研究は、逐次『歴史地理』に登載すべき『倭人考』に就いて見よ。而して余輩の此の研究が、直接、間接に、本書によりて如何に多くの益を受けつゝあるかを見よ。本書は實に考古學的研究報告として、よく其の目的を達したるものなり。學者は本書によりて多大の利益を蒙るべきなり。こゝに重ねて此の有益なる資料を提供せられたる著者に對つて敬意を表す。

◎圖書

◎海外交通史話

文學博士 辻 善之助著

世を早うせし著者の愛兒の名を其命日に因みて、海洋關係の史篇、國民發展に關する史話を輯め、舊稿・新編合せて廿六を選び國民學叢書の第四編として刊行したるものなり。「任那の興廢と物部鹿鹿火の妻及び調伊企難と其妻並に大伴部博麻の義烈」以下「日本文明の性質について」に至る、菊版四九六頁あり。其中「八十八歳の高齡を以て求法の途中南洋の逆旅に薨せられし高岳親王」にては、親王が志牛にして遷化せられし羅越國は今のマレー半島なりとの桑原博士の説に賛し、「鎌倉幕府の外征計畫と國民の激憤心」にては、元寇の時、時宗尙弱齡にして斯る大事を爲すに足らず、擧る連署政村によりて處決せられたりとの説を駁し、政村は文永十年に卒去せる事、當時一般に早熟の風ありし事よりして、時宗の果斷に出でしものなりと論じ、「豊臣秀吉の耶穌教禁制」にては、其の原因は葡萄牙商人及宣教師の不穩なる行動にありしと斷じ、「豊臣秀吉の支那朝鮮征伐の原因」は秀吉勸合を復せんとして成らず、乃ち征明を決せりて五箇の徵證を擧げ、江戸時代に於ける

臺灣及び菲律賓遠征の企圖」に於ては家康が支那貿易の仲介者たらしめんがため、兼ねて又其國も貿易せんがため臺灣視察に有馬晴信を遣したる事及び元和元年村山東菴をして臺灣征伐を圖らしめし事、寛永七年には松倉重政の、同十四年には幕府自らの出宋征伐の計畫ありし事を記す。「濱田彌兵衛」の項には彌兵衛の事業を叙し、天野屋傳説は採るに足らず、天野屋太郎左衛門とは恐らく彌兵衛部下の一人なるべしとせし、鎖國とその得失」に於ては日本の損失なりと云ふ、從來の説に對する内田博士の鎖國によりて得たる利益もありと言ふ所論を參酌して、經濟上、政治上、文化上の三方面より得失を論じ、鎖國は一得一失にして比較計算せば結局損失の方大なるべしとせり、各項參考論文圖書を掲げ又寫真版を挿入す（東亞堂發行、價二、五〇）〔中村〕

●日本歴史圖録 第二輯

本輯に於ては、藤原時代庶民の風俗として大阪四天王寺所藏の扇面古寫經の下繪より、市廛の圖を採りて彩色版とせるを初めとし、以下十五葉の寫真版には、出雲大社に就いては本殿、樓門、拜殿、本殿平面圖、本殿模型等を收め、上古の鏡に就いては、人物畫像鏡、獸帶鏡、六鈴鏡、人物畫象鏡、神人畫象鏡、四神四獸鏡等を、藥師寺、金堂藥師三尊に就いては三尊の外臺座の左右側、

背圖等ありて、圖版の採用に注意せるを見るべく其外文、藤原基誌、仲靈、前九年の役、中尊寺、東大寺南大門、後北條氏、南蠻八來朝、大阪陣、支倉常長、江戸時代前期の京都、江戸時代貴族の調度、西兩の役、近古以後通用錢等に關するものありて、夫れ夫れに數種の圖版を按排せるは、既刊の二輯と同じく編者の勞を多とすべきものなり。尙附するに平易なる解説を以てすること前輯と同じ。（歴史參考圖刊行會發行、非賣品〔西田〕）

●最近支那經濟

善生 永助著

本書は支那現時の財政及び經濟狀態に就き解説したるものにして全篇八章より成り財政、借款、銀行及金融、關稅、度、外國貿易、內國商業、製造工業、鑛山業、交通機關等の事實を詳かに記述し菊版五百五十餘頁凡て平易の文章を用ひ支那經濟財政の概念を得るに恰好の書なり（丁未出版社、價二、五〇）

●毀處卜辭中所見先公先王考

王國 維著

冀日河南省の殷墟より出土せし龜版獸骨文字の研究が其後益々進歩し學界を裨益しつつある所なるが本書の研究は内藤博士の發表せられたる「王多」を讀みて更に著者の試みたる新研究にして今其主要なる点を列擧すれば、卜辭中に貞熒于父とある父は史記宗隱帝王世紀 山海經等に見ゆる父にして即殷の始祖たる帝嚳たる、